

芥川だより

発行日 * 2021年6月1日 e-mail: ab_87968624@yahoo.co.jp

最新号から創刊号まで閲覧できます。 <http://akutagawadayori.sakura.ne.jp/>

編集 川口 伸

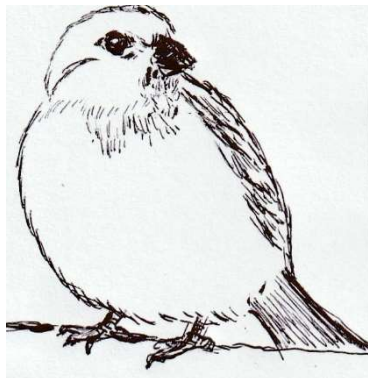
印刷・発行 下村嘉明

〒661-0951

尼崎市田能5-3-10-601

☎090-8796-8624

***** 一部200円です *****



すずめになる覚悟はあるか？

数年前から我が家のベランダに雀が巣を作るようになった。クーラーの室外機用に外壁に開けた空洞を使わなくなって部屋側は閉鎖したのだが外側はそのままにしておいたから、雀が巣を作ったのだろう。春や秋になるとチュンチュンと鳴きながら巣作りを始める。

家内はペットでオカメインコ・ヨウムを飼っているためか、雀も大好きだ。餌付けしようとベランダにエサを置くが食べない。3年前には、雀のひな鳥が巣から落ちていたので、巣に戻したが親鳥が帰ってこないの仕方なく室内での飼育をいろいろと試みたが失敗した。これまで無関心だった雀が気にかかり調べてみると、興味深い記事があった。雀の寿命は2年足らずで、飼育下では7年位と書かれていた。身近な鳥ではあるが、あまり調査はされていないらしいが、意外にも短い寿命に驚いた。

ペットで鳥を飼うことに違和感がある私は、インコやヨウムを毎日見ながら同情していたのだが、雀の寿命を知ると複雑な気持ちになった。自由に飛び回り好きなところに行き好きな相手を見つけて子を産み育てる。しかし、その寿命は短い。一方、飼育下の雀は7年ほど生きるらしい。倍以上生きるわけだ。籠の中の生活は食べ物に苦勞することは無いが、自由に大空を飛び回することは許されない。

野生で生きることは厳しい、天敵や食べ物にも気を怠らない緊張感を持ち続けなければ生きていけない。不慮の災害もいつ起こるか分からない。気楽そうに見える雀だが、彼らは必死で生きているに違いない。雀を小ばかにしていた私は、自分が置かれている安閑とした生活と比べると自分の情けなさに気づく。籠の中での自由と野生のそれとはまったく違うことに。自分が野性を取り戻すことが、怠惰な心を生き返らせる道のように思えるが、その道は非常に厳しい非日常的なものだろう。厳しさと迷いの無い充実感裏表だ。必死に生きておれば苦しみや悩みなどを抱える余裕が無いからだ。雀は今を生きる象徴だ、人が憧れてもなかなか出来ない事を平気でやっている。

死をめぐるあれやこれ (79)

植物園ロス

石川 吾郎

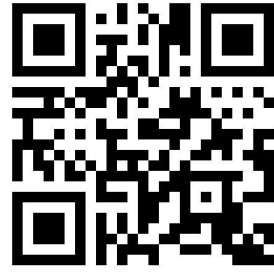
京都では、四月下旬からコロナの緊急事態宣言が出て、府立植物園は一月余り休園になってしまっていた。六月になり久しぶりに再開した植物園にやってきて、自分が植物園ロスになっていたことを改めて認識した。

この十年ほど、私は週に二度は植物園を散歩するのが習慣となっている。カメラを持って出ると心の目がオンの状態になり心地よい緊張感もある。植物園を一回りするだけでもだいぶハードな散歩になるので、運動不足解消にもなった。この五月、毎年楽しみにしていたシャクヤク園の華やかさは完全に見そびれたが、六月の植物園は緑に包まれ生き返った心地がする。バラ園はまだ美しく咲いて、アジサイの美しい季節になっている。つくづくコロナは罪深い。

ところが最近、この植物園をエンターテインメント中心に作り替えるという計画が明らかになっている。バックヤードを縮小し集客できる施設を作るといふものようだ。植物園は、緑深い自然が似合う。ありふれた集客施設は似合わない。このような植物園改悪への反対運動が起こっている。オンラインワンの存在、貴重な街の中の自然と学術的価値を守るべく、みなさんもぜひ署名運動にご賛同をお願いしたい。

(以下、次ページに続く)

ネット請願のチェンジ・オルグのページで、京都府立植物園を検索していただくか、QRコードをスマホで読み込んでください。



芥川だより一七三号 目次 ページ

巻頭エッセイ	下村嘉明	1
巻頭コラム 78	石川吾郎	1
素老人☆よもだ帳 87	坂本一光	2
哲学命いの時事放談 37	祖蔵哲	3
大峰奥駈道 43	下村嘉明	6
新型コロナウイルス愚考(14) 明石幸次郎	明石幸次郎	7
オクラの山たより 57	因了生	8
隠された歴史 32	満田正賢	11
道をゆく 26	成瀬和之	13
マルクスから学ぶ(4)	成瀬和之	15
俳句	土田裕	16
	影山武司	16
編集後記	S K 生	16
ふみの道草 36	山椒魚	18

素老人☆よもだ帳(87)

坂本一光

◆ああ光州よ、我が国の十字架よ

あれから四十一年が過ぎた。一九八〇年五月、韓国南部の都市・光州で戒厳軍の銃剣に立ち向かった「五・一八光州抗争」を詠った韓国の詩人がいた。その詩は同年六月二日付「全南毎日新聞」(二か月後、軍事ファシショ政権により休刊)に掲載され、日本を含め世界に発信された『金准泰(キムジュンテ)詩集 光州へ行く道』金正勲(キムジョンフン)訳、風媒社、二〇一八年)。

当時素老人は大学院を出てオーバードクターという浪人生活四年目に入っていた。軍事政権下で音信不通にならざるを得なかった、三年前まで同じ研究室で過ごした韓国からの国費(日本の)留学生の身を案じながら光州事件の報道を見ていた。

大学に入学したころは、日韓条約の批准をめぐる紛糾があり、大学院に進んでからは東京から金大中がKCIAに連れ去られ(そのとき彼の留学生は「あんなことができる人は韓国には一人しかいません」と言った)、その後、朴大統領の身代わりのように夫人が銃に倒れ、遂には朴大統領自身が暗殺された。軍事政権は

続き、光州事件はその後に起こった。

一衣帯水の国、近くて遠い国との関係はこれからどうなるのか。何一つ根本的には解決していないのではないか。そんなことを思いながら、表題の詩を読み、光州事件を画いた韓国映画『タクシー運転手・約束は海を越えて』(二〇一七年)をもう一度観た。以下に詩を紹介する。

ああ光州よ、我が国の十字架よ

金准泰(金正勲訳)

ああ、光州よ無等山よ

死と死の間に

血涙を流す

我々の永遠なる青春の都市よ

我々の父はどこに行ったか

我々の母はどこで倒れたか

我々の息子は

どこで死にどこに葬られたか

我々の可愛い娘は

まだどこで口を開けたまま横たわっているか

我々の魂魄はまたどこで

破れてこなごなになってしまったか

神様も鳥の群れも

去ってしまった光州よ

しかし人らしい人達だけが

朝晩生き残り

倒れて、のめつてもまた立ち上がる

我々の血だらけの都市よ

死をもって死を追い払い

死をもって生を探し求めようとした

ああ痛哭だけの南道の

不死鳥よ、不死鳥よ、不死鳥よ

太陽と月が真つ逆さまになって

この時代の全ての山脈が

でたらめにそそり立っている時

しかしだれも引き裂くことができず

奪うことができない

ああ、自由の旗よ

肉と骨で蟠(わだかま)った旗よ

ああ、我々の都市

我々の歌と夢と愛が

時には波のように寄せて

時には墓を体に引つ被るにしても

ああ、光州よ光州よ

この国の十字架を担ぎ

無等山を越え

ゴルゴダの丘を越えていく

ああ、全身に傷だらけの

死だけの神様の息子よ

本当に我々は死んでしまったか

これ以上この国を愛することができないように

これ以上我々の子供たちを

愛することができないように死んでしまったか

忠壯路で錦南路で

花亭洞で山水洞で龍峯洞で

池元洞で陽洞で鷄林洞で

そしてそしてそして……

ああ、我々の血と肉塊を

飲みこんで吹いてくる風よ

やるせない歳月の流れよ

ああ、生き残った人たちは

全部罪人のように頭を下げている

生き残った人たちはみな

ぼんやりして食器にさえ向き合うことが

難しい 恐ろしい

恐ろしくてどうすることもできない

(あなた、あなたを待ちながら

門の外に出てあなたを待ちながら

私は死んだのよ……彼らは

なぜ私の命を奪ったのでしょうか

いや、あなたのすべてを奪ったのでしょ

うか

貸し間暮らしの身でしたが

本当に私たちは幸せでした

私はあなたによくしてあげたかったわ

ああ、あなた！

しかし私は子をはらんだ身で

このまま死んだのよ あなた！

すいません、あなた！

私に私の命を奪って

私はまたあなたの全部を

あなたの若さ あなたの愛

あなたの子 あなた

ああ、あなた！私が結局

あなたを殺したのでしょうか

ああ、光州よ無等山よ

死と死を切り抜けて

白衣の裾を翻す

我々の永遠なる青春の都市よ

不死鳥よ、不死鳥よ、不死鳥よ

この国の十字架を担ぎ

ゴルゴダの丘を再び越えてくる

この国の神様の息子よ

イエスは一度死んで

一度復活して

今日まで、いやいつまで生きるといわれ

たか

しかし我々は数百回を死んでも

数百回を復活する我々の真の愛よ

我々の光よ、光栄よ、痛みよ

いま我々はさらに生き返る

いま我々はさらに逞しい

いま我々はさらに

ああ、いま我々は

肩と肩、骨と骨をくっ付けて

この国の無等山に登る

ああ、狂うほど青い天に登って

太陽と月に口づける

光州よ無等山よ

ああ、我々の永遠なる旗よ

夢よ十字架よ

歳月が流れば流れるほど

いつそう若くなっていく青春の都市よ

いま我々は確かに

固く団結している 確かに

手を繋いで立ち上がる。

(かたちは心であり、心はかたちになる

■大分の素老人)

哲学爺いの時事放談 (37)

祖蔵 哲

新型コロナウイルスは依然として猛威をふるっており、最近に変異株というより強力な種類に変化して人間に脅威を与えている。でもよく考えてみればウイルスは地球が約45億前に誕生してから今から30億年も前に誕生している。人類誕生はわずか20万年前。地球カレンダーで例えると1月1日が地球の誕生日、そしてウイルスの誕生日は5月7日である。人類ホモサピエンスの誕生日はもう

が発生しやすいという特徴があるというこのエラーの多きこそが変化対応に有効である。私たちも「トライ&エラー」つまり「試行錯誤」の有効性を十分に知っているはず。そんなわけで「ウイズ・コロナ」は必然である。問題は「共存」ではなくなる可能性であるが、人類全体とすればそのような脅威は現在ないらしい。重要なことは、個々の生存、すなわち個人の生命が適切に守れるかという医療体制の問題になる。

新型コロナウイルスの影響といえは、「東京オリンピック」の開催問題である。開催一ヶ月前を切った今になっても「強行―中止」という意見対立が問題化している。強行派が恐れるのは「中止」による「オリンピック不要論」である。以前、私はオリンピックというスポーツの本質を哲学したが、それはまさしく「政治」であり「商業」であった。オリンピックがもととはオリンピックの神々に捧げる「宗教祭典」であったということはそれが極めて「幻想的儀式」で「政治的」なものであったということを物語っている。これが現在、政治の道具、商業の手段と変化化してきている。さらに、反対する「大衆」は「オリンピック」で一体化する幻想も失ってきている。それは世界が「新型コロナウイルス」で一体化できなかったからである。人類共存に向けての一体感すら失われたのである。ワクチンの開発、分配も「平等」であり、「弱者―強者」の「分断」

もすすんでいる。「オリンピックのナショナルリズム」は自国内でさえ、「分断」をもたらしている。それを「大衆」は嗅ぎとった。大衆の「中止コール」はそのような感情である。それは「政治不信」でもある。

「コロナ危機」がもたらしたものは新しいものではない。それは以前からあった問題の「炙り出し」である。「国際協調」「グローバル経済」「医療体制」などである。それらの多くは「政治問題」である。

私たちは「個人」であり「市民」でもある。「国民」は最適だと信じて「政治家」を選ぶ。その政治家が「政治」を行い、「国民の意志」として「国政を執行」する。これが現在の政治、「民主主義政治」である。しかし、「国民主権」と言われるこの制度にあつて、我々「国民」が選択した「原因」である「意志」によって行われた政治の「結果」は誰に責任を問えばいいのか。結局、選んだ国民が悪いということになるのか。そして、そもそもそのような「意志」さえも示していないという「消極的反对者」や「棄権者」もいる。それらの人々にも責任を問うべきなのか。コロナが「炙り出した」潜在的な問題には「民主主義」も含まれる。そもそも「民主主義」とは何か。今回も哲学しよう。

(1) 民主主義の変遷

① 民主主義の故郷

いわゆる「デモクラシー」は知られているように古代ギリシャの「デーモクラティア」が語源であり、イメージとしてポリスで行われていた抽選による平等な直接参加型の政治が始まりだと見方が一般的である。それは「人民」を意味する「デーモス」と「支配」を意味する「クラトス」の合成語であり「人民支配」の意である。【参加抽選平等】【直接全員参加】

しかし、都市国家アテネが支配したアッティカ地方は、広さは佐賀県ぐらい、人口は最盛期で市民は家族を含み12万(そのうち、市民権を持つ成年男子は3万)。さらにメトイコイといわれた在留外人が3万、奴隷が8万人、合計で23万とされている。民主主義といっても参政権を持つ成人男子3万人による小規模の政治であった。もちろん奴隷制社会であり、女性は政治から排除されている。現在のような「平等」ではない。古代ギリシャの政治哲学者アリストテレスは政治形態を分類し「多数の支配」として「民主制」、「少数の支配」として「貴族性」、「一人の支配」として「君主制」という区分をしめたが、歴史もそのように動き「衆愚制(ポピュリズム)」「寡頭制」「僭主制」になり古代ギリシャの「民主主義」は200年も続くことなくいったん途絶えた。

このような意味から「民主主義」の対義語は「権威主義」である。それを意識

してか、アメリカ大統領バイデンは中国・ロシアに対する「新冷戦体制」の構図として「民主主義対権威主義」というスローガンを立ち上げたのであろう。

② 共和制から宗教の時代、そしてルネサンスへ

衆愚政治が専制政治を呼び、その政治リーダーが愚かになるに従い、ギリシャの都市国家は墮落して、より大きな帝国に飲み込まれていった。もとより当時のローマ帝国の共和制はエリート集団の「法」による支配であり、「公共」という「公益優先」の実利世界であった。そこでは個人の意志より公共の意志が優先されたのである。【エリート政治】【公共利益優先】

このように「個人の生存権」と「国家の利益」の対立の調停は歴史上分裂して進んでいったといえる。その意味から次に続く西欧中世世界は「宗教」による両者の和解的統合であり「神」を媒介とする「疑似統一」でもあったといえる。しかし、産業革命や植民地経営を始めた西欧は異宗教や異世界と遭遇し再び自身身の「アイデンティティ」がよみがえってきた「個人の再生」(ルネサンス)である。

(2) 個人社会と国家の「狭い回廊」

古代民主主義は小規模ながらも市民である「個人」が直接、全体の政治体で

ある「国家」に意志を反映できる政治体制であった。しかし、それ以後の歴史は「個人」と「国家」の溝が広がりそれを修復するのが困難であった。それを乗り越えようとしたのが17世紀にはじまる「身分制議会革命」である。その思想的バックボーンを提唱したのが哲学者ホッブスである。

近代的な議会の源流となるのは、1215年の大憲章(マグナ・カルタ)である。これは国王の権限を議会の下において制限したものであり「国民」と「国家」を少し接近させたものであるといえる。そしてこの時代、その権限の根拠を始めたのがホッブスの著わした『リヴァイヤサン』である。すべての人間は平等な自然権を有し、「万人の万人に対する闘争」を克服するため社会的な契約を結び、国家に主権を委譲していると考えた。その思想は社会契約説の立場で絶対王政を擁護することにとどまったが、しかし重要なことは「国家」の存在は「個人」の「意思の集合」に基づくと哲学的に分析したことである。それ以前までは「国家」の意志は「神の意志」を受けた「国王」にあるとされていたからである。「個人―国家」の埋めるべきその「狭い回廊」はこの「社会契約論」としてホッブスからロック、そしてルソーの「一般意思」に引き継がれやがて、「フランス革命」で頂点に立つ。

(3) 民主主義のもう一つの対立「自由主義」

1789年8月26日、フランス国民議会で制定された「人間および市民の権利の宣言」、いわゆる「人権宣言」はルソンの啓蒙思想などの影響を受けた。画期的なことは「人間は自由で権利において平等なものとして生まれ、かつ生きつづける。」という「自由」を人間の根源的権利「普遍」としたことである。それは紛れもなくルソンの思想にある「人間の自然権」としての「自由」であり、その「意志の集合」が「一般意志」といわれる全体の意志を決定する要素である。民主主義の単位「個人」という状態が「自由」として定義され直したのである。

しかし、「普遍的」というものは「時間・空間」の制限から離れているということの意味するため、この「普遍的自由」も「市民―国家」という枠組み自体から解放されることになる。この考えは「都市国家」であれ現在の「国民国家」であれそのような政治体制そのものから離れ一種の「無政府」状態の世界を志向するということにもなる。このような見方は極端かもしれないが、従来より個人で構成される「民主主義」の克服すべき対立は「国家」という全体の権力であったが、ここに「民主主義」が克服すべきもう一つの対立項として「自由」が登場した。確かに「民主主義」での理念では全員参加で話し合い、その結果がまとま

ればそれに従うという最低限のルールがある。しかし、「自由主義」はそれに従うかどうか個人の内なる自由ということになる。歴史にみられるようにこのフランス革命の急進的思想は革命の挫折によりいったんは歴史から退いたが現在まで「民主主義対自由主義」は問題点を引きずっている。

しかし、実を言うと古代アテネの民主主義も「自由」を基本としていたのだが、それはこういう理由である。古代ギリシヤは誰もが知る「哲学発生の地」である。「哲学する」すなわち「議論すること」によって共同体の意志を決めるという方法が考案されたこれが「デモクラシー」の基本を作った。しかし、この議論には条件がある。議論には、その発言の責任がともなわなければならないのである。「言行の一致」必要となる。また、議論の発言は強制でなく「自由」が前提とならなければならない。だから「自由」は民主主義の要素でもあった。

(4) 「民主主義」か「自由主義」か「新自由帝国主義」へ

「民主主義」と「自由主義」の対立を考えると、「自由民主主義」という言葉の不自然さが思い出される。その原因は、いわゆる「西側」、とりわけアメリカをモデルとする政治制度を指す用語としてこの用語が頻繁に使われてきたからである。「自由民主主義」という観念は、社

会主義と議会議制との融和を図ろうとしたヨーロッパの「社会民主主義」や、かつてのソ連・東欧型共産主義国家の主張した「人民民主主義」とは一線を画す民主主義なのだ、という意味を秘めているからである。要するに、「自由」(リベラル)・(民主)・デモクラシーは、リベラル(自由主義的)な原理と結びついた無理やり結び付けた独特な形態の民主主義である。この原理が「リベラル」という自由概念なのである。この概念の使用により「自由主義者」は「民主主義世界」を普遍世界と自らを個人の意志の反映者であると名乗ることを可能にするのである。つまり、民主主義国家が守る個人の権利さえからも「自由」になることを奨励し、自らの支配する「自由主義帝国」に引きずり込もうという戦略だからである。現在の「新自由主義」(リバタリアニズム)は緩やかな「自由主義」である「リベラリズム」がこの原理をこのように自己利益に結びつけた「新帝国主義思想」である。

(5) 「民主主義」の補充―「大統領制度」が「全体主義」を作る

一方で「民主主義国家」内での対立「個人―国家」はどうなっていたのか。それは政治の技術管理化、すなわち「官僚制度」の導入である。個人の意志は、選挙という「代理制」になり、託された「政治家」は「官僚」という「政治技術」と

ともに国民の意志を執行する。ここに国民の意志はさらに分化され「主権」と「執行権」に分かれる。この遠のいた国民の意志「執行権」を再び取り戻そうという制度が「大統領制」である。「大統領」は国民から直接選ばれ「執行権」によって議会の決定に関与できる。基本的に「民主主義」そのものに欠陥があるという認識のもとに考えだされたのがこの「大統領制度」である。その意味では「議員内閣制度」をとる日本はイギリスと同じように「立憲君主国」である。それは両国とも「民主主義」に対しての信頼が基本にあると思うが、違いはその歴史である。イギリスは「議員内閣制度」の創設国であり長い歴史をもつが、日本はやっとな後に導入した歴史経験の浅い国である。そんな国が果たして単純に「民主主義」を信頼してよいものか、心配になる。

さて、そのような「民主主義」の欠陥を補う「大統領制度」であるが、これが「全体主義」をもたらした現況でもあるといったら、もう何も信用できなくなるかもしれない。ナチスドイツのファシズムを招いたのがこの「大統領制」の「例外状態の政治」である。よく知られるように、第一次大戦に敗れたドイツは戦後世界でも傑出した「民主主義体制」である「ワイマール憲法」を持っていた。しかし、その「民主主義」の欠点を熟知していたために「大統領制度」を採用したが、やがて世界の景気が不況に見舞われ

ると強い国民は「カリスマ」を求めるようになり「指導者民主政治」に傾いていた。そこで設けられたのが「例外状態規定」である。国家が危機に陥った時は大統領が超法規的処置をとることができるという法規定である。これがヒトラーのナチズムを「全体主義国家」に導いたということはある意味「民主主義」に与つての最大の「悲劇」である。

(6) 「民主主義」の現代的課題

これまで述べてきたように「民主主義」には「潜在的対立問題」がある。「個(市民)―全体(国家)」の問題については、どのように両者を接近させるのかという「方法論」である。「直接意志反映」「代理選定」そして「官僚制度」としての「政治技術方法」も問題でもある。一方の「個人」(自由)―「国家」(規制)―「権利―義務―責任」の問題や「主権」の問題、そして「国家とは何か」の「物理的領土―概念的共同体」も問題になる。これらはすべて「部分と全体」「具体と概念」「自由意志の存在」という哲学テーマと深く関連している。

ただ、現状の「民主主義」をみると悲観論が支配する。現在日本では国政選挙の投票率は50%前後で世界30位にある。政治が信用されなくて、そのせいで政治自体が墮落していく、そしてさらに政治が信用されなくなるという「悪のスパイラル」が働いている。そして、選挙

以外に残された数少ない国民の意志を政治に反映する手段である「住民投票」でさえあの「愛知県知事リコール署名偽造事件」によって汚された。

古代の「民主主義」を思いだしてみよう。かれらは議論し意見をいうがその結果には責任をもっていた。これが「自由」の本質である。現代の我々は自由すらも自ら放棄しているようだ。

それらに代わり現代を支配するのは気まぐれな大衆政治「ポピュリズム」という「現世利益信仰」である。そして国民はそのバラマキ手である「民主型独裁政治家」を切望している。さらに国民の直接の声はデジタル技術によって改変され統計処理によって「エビデンス」という『新たな事実(ポスト・トゥルース)』が作り出される。

「コロナ危機」は「民主主義の危機」でもある。そのどちらもが「潜在的リスク」をもっているからである。本質を知らねばこの危機は見えてこない。そこに本質に向かう「哲学をする意味」がある。



大峯奥駈道(43)

下村 嘉明

今年5月に古希を迎えた。もうすつかり爺さんの仲間入りをしたわけだ。何も変わらないと思いつつも、気持ちの上では歳を取ってしまったという寂しさがどこことなく漂う。そんな気持ちを感ぜながら、5月9日に、いつものように宝塚駅から六甲山に向かった。

塩尾寺に続く急な参道を登りながら、今日は体調が良いと感じたので少し早く歩く、40分もかからずに寺に着き、休まずに六甲山縦走路を登る。この急登も難なく登り尾根筋に出た。東六甲縦走路はわりと平坦なコースなので尾根筋に上がるまでの急登さえ登れば、あとは楽なコースである。いつもの目標地点の国道分岐点にも3時間もかからずに着いたので、今日は天気もいいし、ひとつ頑張つて鴨越駅まで行くかと気が変わった。ライトを持ってきていないが、日没の6時半までには着くだろうと考えたのである。

タイムリミットが決まったので、トレランのまね事をしながら走れるところはジョギングする。登りは太ももに手をかけて登る。ストックを使わずに登るほうが楽なような気がした。6時間足らずで摩耶山に着き市ヶ原に向かって駆け下りた。3時過ぎに市ヶ原に到着し登り返しで鍋蓋山に向かう。鍋蓋から菊水山まで

はいちど下り、また登り返す。菊水の山頂に着いてほっとした。後は菊水の急坂を転げないように注意して下れば鴨越駅までは楽勝だ。いつも菊水の登りでは苦勞させられたが、下りでも気が抜けない。疲れているので滑ったりけつまずくと大ケガになる。しかし、登りに比べれば楽だ。

菊水を20分ばかりで下り鴨越駅手前のベンチで着替えをしていたら、中年のトレランナーがゆつくりとしたペースで追い越していった。私は、市ヶ原からはすれ違う人は三二人いたが鴨越駅方向に行く人は私が最後だと思っていたから、意外だった。やはり自分と同じように思つて縦走してくる人がいるんだと、なんだか嬉しくなった。

鴨越駅について自販機で飲料水を買って一気に飲み干す。3年前にも同じルート歩いたが、その時に比べても早く楽に歩けたことで自信がよみがえってきた。しかし、これが私のベストタイムになるかもしれないと思う気持ちもあった。歳を重ねて古希を迎えたわけだから、もうこれ以上体力が上がり強くなることもないだろう。いや、無理な運動はケガの元かもしれない。疲労の回復も遅くなっているし、とっさの判断ミスも多い。素直に自分の身体の声を聴き無理をしてはいけなさと自分にいい聞かせる。

5月30日も天気が良くて六甲山に行く。先日来から膝が調子悪く違和感があ

新型コロナウイルス禍愚考(その14)

明石 幸次郎

ったのだが、歩くだけなら行けるだろうと判断したのである。月に二回は六甲山に通っているから、今月も登らなアカンと気合を入れる。早く起きて飯を炊き昼飯用のおにぎりを2つ作り、大きなトマトと焼鮭を用意した。

婆さんは毎週、日曜日の一晚だけはシヨウトステイをお願いしているので、帰りが遅くなっても差し支えないから、六甲山に行くことが多い。婆さんの介護の世話をして、用意をすませ送り出しを家内に頼み7時半ごろに家を出る。猪名寺駅まで歩いて15分、電車で宝塚駅まで20分。これが六甲山へのアクセス方法である。一番早くて安いルートである。宝塚駅から塩尾寺までは、急な斜面に建つ静かな住宅街を川沿いに登り、塩尾寺に続く坂を上り続ける。ここが一番苦しいところで、登るのも下るのも大変だ。トレランの猛者が走って登っているのをたまに見かける。宝塚から須磨浦公園までを4時間半で走るのだから、どんなところでも歩くことはないそうだ。

話が少しそれたが、登り続けて六甲最高峰の下まで来たが、どうも調子が良くない。やはり膝の違和感があつて踏ん張りがきかなくなっていたが、摩耶山までなら大丈夫と思い歩き続けた。何とか摩耶山まで歩きゆつくり市ヶ原まで下り、鶴越駅は諦めて新神戸へ下った。

足が疲れて筋肉痛になった。体調が良くないと、鶴越駅まで行くのは難しい。

新型コロナウイルス感染拡大という非常事態という状況は中々収まらず、逆に拡大したりして、大阪は医療崩壊の一步手前だと連日報道されています。

先日、読売新聞に「遅れたコロナ対応」として、田中明彦さん(政策研究大学院大学長)が書かれた記事が目にとまりました。

それは、この1年余りの感染の経験から国家として何を学ぶのか、それを整理する必要があるとして「日本という国家」には異常事態に対応するための仕組み、能力が大きく欠如していたことである。

それは、まずは感染初期段階のPCR検査の実施体制を迅速に強化できなかった。ワクチン開発を国が主導して実施出来なかったこと。そして、現在目の当たりにしているように、ワクチン接種にも長期の時間(高齢者のみは、7月末接種完了予定)を要することとして、田中さんはこれら皆、国家としての日本の体制不備と能力欠如を示していると言いつつ切っています。

菅首相が緊急事態宣言の発令として、NHKに出て、アメリカ訪問の成果?としてのワクチン供給拡大で、ワクチン接種を一日100万回に増やし、その実現

のため自衛隊まで動員し、国民の安全と生命を守るので、それまでは、自粛をして、感染拡大を防ぐようお願いしたいと言っています。しかし、現実には実務的に、ワクチンの打ち手が足りない、集団接種の会場をどうするか、供給体制の問題、開業医は接種に協力するかは国が指示、強制は出来ない等々で、菅さんが幾ら命令しても、思ったようには実現することは困難ではないでしょうか。

まあ、それは誰かがさぼっていて物事が進まないのではない。皆頑張っているが、出来ないことは出来ないのが現状でしょうか。

それでは、今後どうしたらいいのか? 田中さんは、現実的なのは非常時に有効に対応できる人材と資源を政府が日頃から維持しつつ、それを非常時に市場と社会から人材や資源を「動員」する仕組みを制度化しておくことであるとして、この様な発想のプロトタイプ(原型)は戦時体制であり、第二次世界大戦時のアメリカがこれを最も効果的に実現した(潜在的な資源、人材、科学技術が元々、日本を遥かに上回っていた)と言っています。

これからも、このような提言は色々な専門家からもなされてくると思いますが、今までは提言はやりっぱなし、政府は聞きっぱなしでありました。

これから、それを実現させるには政治家がその為の法律を作り、非常時に機能

する制度を作って置かねばならないというところで、それを作らせるように、我々、国民も次の選挙で、それを実行できる政党、国会議員を選ぶなりをして、日頃から意識を持って働きかけなければならぬでしょう。

当面は、高齢者のワクチン接種の順番がまわってくるまでは、社会的な迷惑をかけない年寄りとして、大人しく自粛生活を続けていきたいものです。そして、参考にしたのは、改めて読みましたドキメンタリー小説の「漂流」(吉村昭著)です。

江戸時代土佐の海でシケにあつて、黒潮に乗って漂流した男達(4人)が絶海の火山島(鳥島)にたどり着いたが、2年間で仲間たちは次々倒れて亡くなり、ただ一人生き残って、12年以上に及ぶ苦闘の末、ついに生還した船乗りの「長平」という男の話であります。

その長平が生き残った秘訣? は、①毎日、何かをして身体を動かす ②偏食しない(この島は何も食べるものがない。唯一アホウ鳥が何百万羽もいたので、これを主食とした、あとは少量の魚貝、海藻だけ) 長平は、貝、海藻、魚なども意識して採った。③希望を失わない ④念仏を唱え、神、仏に祈る ⑤自分が生かされていると信じていることであつたと言われています。

まあ、この孤島での壮絶な暮らしに比べると、コロナウイルスとの戦い? は、

「屁」みたいなもので、自粛生活で、食べ過ぎ、飲みすぎないで、運動をするこ
とで、神、仏に祈るまでもなく何年かす
れば生き延びられるのではないでしょう
か？

オクラの山たより (57)

困了生

一

人が長らく世にあつて逃れられぬもの、それは老化と死です。死については自ら経験したことはまだありませんが、徐々に老化していく現象については古稀間近となった筆者にはいくばくか身に覚えがあります。まず、髪に白いものが混じったりいつしか消えていったり、目がかすみはじめ、耳が聞こえにくくなったり、歯もぐらつきはじめて抜け落ちたりもします。ふと気づけば歩く速さもずいぶんとおそくなり町を歩いていても颯爽と歩く若者に次々と追い抜かれもしますし、階段を一気に駆け上るなどということもできにくくなっています。いや、本当に情けない。「体力は日毎に減じ、志気は益々微とならん」とは高齢者であれば誰もが一度は感ずることでしょう。

与謝蕪村も六十代前後から病気がちと

なり身体のあちこちの不自由が目立ってきます。兵庫県出石の俳人霞夫(かふ)と乙総(おとふさ)宛の書簡に病気がちの日々を送っていたことを伝えて次のように記しています。

さて愚老儀、当年は悪星の障碍に候や、夏秋を経て病に犯され、ようやく全快いたし候ところ、又々霜月下句よりこころ悪しく、閏月に至り候はもつてのほかにて、とかく老病と存ぜられ候。ただ今は社中鉄僧の薬にて、一兩日はよほど快候。このていならば、春暖を得候はば、めきめきと快然と存ぜられ候。当年、六十歳と相成り候。来本卦よりは更正いたすつもりに候。それ故はやく当年を過ごし申したく候。十五日は立春に候故、それから、こちらの世の中と指を屈し候て相待ち申し候。

一七七五(安永四)年閏十二月十一日付

「悪星の障碍」とは「運勢の悪い年回り」の意。「閏月(うるうつき)」とは暦の調整のために平年よりも余分にもうけた月のことで、安永四年は十二月の後にもう一度「閏」の十二月がありました。「社中鉄僧」とは蕪村の句会に参加していた俳人で医師であり、我が国最初の人体解剖図譜「蔵志」を刊行した山脇東洋の門人でした。蕪村の門人かつパトロンでもあつた寺村百池の父親です。「来本卦」

とは来年が生まれ年の卦であり還暦の年なので本卦還りの年でもあるということ。還暦で生まれ変わり運が良くなるという迷信が当時はありました。

一年近く続く身体不調で「自分も年かな」と気を重くする一方で、いや来年は還暦で自分も生まれ変わって「心機一転」春ともなれば元気になるさ、と自らを励ましていきます。しかし、所詮は年寄りの根柢なき願望、残念ながら蕪村の希望の通りには行きませんでした。

この安永四年から四、五年の間、蕪村の実生活のありようを書簡からみていくと、長患い、老齢から来る歩行困難や手足のしびれ、視力の衰え、さらには腰痛や頻繁に起こる下痢、持病となった胸の痛みなど、たえず肉体的な不調に悩まされ続けています。そうでなくとも慢性的ともいえる生活の困窮、そして溺愛していた娘くの離婚問題も重なって精神的な懊悩はかなりなものであつたと想像されます。

とはいえさすがは蕪村。このような閉塞状態にありながら生来の明るさを失うことはありません。門人へ窮状を訴える文面にも

貧乏神の利生(御利益)いちじるしく、
ありがたく存じ奉り候。

とか

大晦日といふ大敵まのあたりに攻め
寄せ候

などと貧困を笑いで紛らわす余裕を見せ

ています。しかし、この笑いの裏にある蕪村の思いを自分の経験に照らし合わせて考えてみると単純に「本当にそうだね、ハハハ……」と笑うわけにはいきません。笑いに涙がつきものなのは「フーテンの寅」に限ったことではないのです。

二

人間、年老いて未来の希望が薄れてくると「もう、自分もアカンかな」と頭をうなだれる人も多いですが、中には「体力、気力、まだまだ若い者には負けぬ」「あの青春の輝きよ、今一度」とばかりに「老いらくの恋」に走る人は広い世間ではときどきみかけます。歴史上の有名な人に限ってみてもそうした人物は何人も存在します。

有名なのはドイツの文豪ゲーテ(二七四九〜一八三三)。彼は長い人生の中で何度も愛する女性と出会いますが、最も有名なのは七十四歳の老ゲーテが十九歳の少女ウルリケ・フォン・レヴェッツォーに恋して求婚にまでいたつたこと。当然のことですが、あまりの年齢差(何と五十五歳)のため両親に猛反対されて結婚はなりません。しかし、挫折してもただではおきないゲーテ。十九歳の少女に失恋した悲嘆の中から「マリーエンバート悲歌」という詩、ゲーテの代表作の一つといつてもよい傑作を完成させています。その一節を紹介すると次の通り。

訳者はドイツ文学者で歌人でもあった高安国世です。

どうしようもない憧憬に
此方彼方へ私はさまよい
慰める手だても知らず

ただ果てもなく涙は流れる
よし涙よ 湧きやむな 流れ続けよ

この心の火を消すことは
それでもできまい

生と死が

むごたらしくも組み打ちする

私の胸の中は今すでに

狂おしく裂けんばかりだ

恋に破れた二十歳前後の若者が書いたような哀切尽きない詩です。とても七十四歳の老人の詩とは思えず、年老いてもあふれ出る情熱にただもう驚くばかりです。余談ですがウルリケはゲーテの求婚を断つた後、一生独身を貫きました。理由はわかりません。はた目から視れば人を恋すること愛することは美しいと感じますが、同時に滑稽なことにも見えます。しかも、近代の恋愛小説によくあるように時として思いもよらぬ悲惨な結果をもたらすものかもしれません。

このゲーテほどではありませんが、五十代以降の蕪村が何人かの女性との交遊が知られています。その女性たちはすべて妓楼の妓女たちですが名前の判明して

いる女性が三人います。付き合いの古い順にあげれば京の一条戻り橋にあった娼家の妓女「綱」。大坂遊里であった新町の妓女「梅」。そして祇園の妓女「小糸」です。

まず「綱」から。「綱」は一条戻り橋にあった娼家「柳風呂」の妓女でした。

風呂屋でなくても当時「――風呂」という名の娼家が多くありました。その「柳風呂」に蕪村はよく通い「綱」は明和（一七六四〜一七七二）のころの蕪村のなじみであったのです。「綱」という名は大江山の鬼退治で有名な源頼光に仕え頼光四天王の筆頭といわれた渡辺綱が一条橋戻り橋で鬼女の腕を切り落とした伝説にあ

やかつたものです。小柄で可憐な妓女に

猛々しくも武勇の誉れ高い武士の名をつ

けるとはおもしろい趣向ですが、蕪村の

句を門人が筆録した「落日庵句集」には

次のような句があります。①と②、③と

④はそれぞれ連作です。

① 雛店の 灯を引くころや 春の雨

② 春雨や 綱が袂に 小提灯

川千鳥

一条戻り橋の娼家にあそびて

③ 羽織着て 綱も聞く夜や 川千鳥

④ ふられたる その夜かしこし 川千鳥

①と②の句は一七六九（明和六）年二月十日の作、③と④の句は一七六八（明和五）年の作です。③の句には蕪村自らが撰集した「蕪村句集」では次のような前書きが付けられています。

一条戻り橋のもとに柳風呂といふ娼家あり。ある夜、太祇とともに此の楼にのぼりて

この前書きから娼家「柳風呂」に蕪村は親友の太祇と連れだつてよく行つていたことがうかがわれます。値の張る祇園の妓楼に比べれば登楼の費用は安く、パトロンの書肆汲古堂主人である田中庄兵衛などといった富裕な弟子たちの金銭的な助けなしで手元不如意の蕪村でも遊ぶことができたと考えられます。「座敷乞食」といわれた俳諧師は句会の流れで高級妓楼に行つたとしても、その支払いにおいてはすべて経済的に富裕な弟子たちに頼るしかありませんでした。蕪村といえどもそうです。

①と②の句意は雛人形を売る店の灯が消えたあと、手にした小提灯をしめやかに降る春雨に濡れないように着物の袂でおおつて道案内をしてくれる、というもの。その姿が美しく、そして可愛らしいとも感じる妓女がああ勇猛な武士の名を持つていてという滑稽味がこの句の妙味といえそうです。雛店の灯から妓女の綱

が持つ小提灯への灯の転換も美しく見事です。

③と④の川千鳥の連作にはそうした綱への蕪村の思い入れが出ています。妓女の綱に寄り添われて千鳥を聞く夜の娼家の情緒が語られる③の句に続いて④の句では「ふられたる夜」へと移ります。かわいらしい妓女にふられることは時代劇でもよく見る色里の風景です。情ありげに振る舞う妓女に客がその気になつていと頃合いを見計らつて「ちよつと」と言い残して中座した妓女がいつまで待っても帰らない。ひいきにしている綱に寄り添われて聞く川千鳥の情緒と違い、部屋に一人ポツンと取り残されて聞く千鳥の声は切なく辛いものだったでしょう。妓女にふられた蕪村の気持ちに「その夜かしこし」と大仰に表現したところが俳諧の滑稽さといえます。悲恋は本人にとつて悲劇でも傍から見れば喜劇に見えま

すから。

老いが恋 忘れんとすれば 時雨かな

宛先の大魯（一七三〇〜一七七八）は蕪村に

師事した俳人で元徳島藩士。新蔵奉行と

して大坂に赴任しますが、一七六六（明

和三年、任地で遊女と駆け落ちして、

致仕を余儀なくされたという経歴の持ち

主。しんそこ恋した遊女と暮らすことの

できた大魯にこうした愚痴っぽい句を送

った蕪村の真意はわかりませんが、しぐれの情緒にひたりながら「老いが恋」を愛惜しつつも「わすれん」とおのれに言い聞かせています。自分を哀しみ中のピエロのように表現しているのはおもしろい。

一七七四（安永三）年、蕪村は五十八歳です。大魯とはちがって五十代の彼はこうしたほろ苦い老いの遊びを繰り返していたのでしょうか。しかし、六十代の彼は違います。蕪村は本気の「老いらくの恋」におちいることになるのです。

三

二番目の「梅」は大坂新町の妓女で、松村呉春（月溪）の正式の後妻となった女性です。俳人としても蕪村の門人の間では高く評価された才女でした。呉春は京都四条派の祖で絵画・俳諧の両面での蕪村の門人です。蕪村の死後、その妻子の生活をいろいろと世話したことはすでに触れました。

呉春の家は、京都金座（中京区室町通御池上ル）の年寄役（管理職）をしており、若い呉春も家業を継いで金座の平役を務めました。当時の金座の報酬は平役でも月収がおよそ百両と言われ、呉春は左団扇だったでしょう。最初の妻である雛路（ひなじ）本名は植田はるは島原の太夫でしたが呉春が身請けして正式な妻としました。彼の富裕ぶりからいって

何の問題もなかったことでしょう。雛路は島原の太夫だっただけに身につけていた教養はかなりのものでした。俳諧もよくし、その師匠は蕪村の親友太祇。雛路の句を一句紹介します。一七七二（明和八）年、太祇が編んだ「歳旦帖」に収められた句です。

羽子板の 多にしめでたき 光かな

かわいらしい句ですが、この句を作った雛路は一七八一（天明元）年に海難事故で急死します。その後、愛妻を失った哀しみのため僧形となった呉春はずっと妻帯せずに暮らしていきます。晩年になって呉春は自堕落な生活をするようになりますが、そうした呉春に寄り添い世話をしたのが大坂新地の妓女「梅」（正式の名は「みちこ」）です。梅は蕪村門下の俳人でもありましたが、呉春より一歳年上の彼女は身請けされて長らく彼の世話をし、そして正妻となりました。蕪村と

いう共通の話題を持った二人は添い遂げます。一八一〇（文化七）年に六十歳で梅がなくなつた後、呉春も同じ六十歳で亡くなっています。梅女の死の八ヶ月後のことであり、梅女の後を追うような死でありました。

この呉春の妻となつた梅女は大坂における蕪村の門人や知友たちから愛された存在でした。蕪村も自作の絵画を贈つたり俳諧の指導をしたりしています。恋し

ているかどうかは別として梅女への深い親愛感があつたのは確かでしょう。一七七七（安永六）年春、梅女に贈つた蕪村の自画賛で次のように書いています。

梅女がもとよりの文の端に、初桜の発句書きつけて、都の春色いが見過ごし給ふやなど、ほのめき聞こえければ、その返りごとするとて、筆のつゝに写して贈りぬ。

梅女は蕪村から贈られたこの画賛を摺り物にしてひいき筋に配りました。それは今も残っています。それは木版の二枚摺りで一枚目に右の蕪村の画賛、二枚目には梅女の発句三句と几童の一句とから成っています。師である蕪村と自分との強いつながりを世間にアピールしたものと見えるでしょう。そして、この梅女と蕪村との間の関係に祇園の妓女小糸がわりこんできて梅女の嫉妬という問題が後に生じます。

四

後に述べる祇園の妓女小糸との恋のさなかの一七八二（天明二）年五月、六十歳の蕪村は自らの手で俳書「花鳥篇」を出版しました。その序文の中で蕪村は「花鳥篇」と題号して、我が疎懶（そらん）の罪を謝する」と言っています。つまり、「花鳥篇」という小冊子を作つてあちこ

ちに配り、これまでの御無沙汰のお詫びをする、ということでした。祇園の妓女小糸に夢中になりすぎて門人や知友とすっかり疎遠になってしまつて、申し訳ない、ということでした。その「花鳥篇」の中の『糸による』の巻に梅女の句が入っています。そして、蕪村が夢中になつている小糸の句も入っています。

都に住み給へる人は月花のを

りにつけつつ、よき事をも聞き

給はんと、いと妬（ねた）くて、

蕪村様の文の端に申しつかはし侍る

糸による物ならにくし風（いかのぼり）

大坂 うめ

さそへばぬるむ 水の鴨川 其答

盃に 桜の発句を わざぐれて 几童

表うたがふ 絵むしろの裏 小糸

ちかづきの 隣に声す 夏の月 蕪村

をりをりかほる 南天の花 佳棠

其答は歌舞伎の名優初代沢村国太郎。佳

棠は蕪村の弟子で、パトロンの書肆汲古堂

主人田中庄兵衛です。この「花鳥篇」も

汲古堂から出版されたとされています。

さて、梅女の発句はその前書きによる

と「都に住み給へる人は」月や花のとき

にはよいことを（蕪村から）聞いていら

つしやうて大変ねたましくて嫉妬心から

「蕪村様」への手紙に書き付けた句だと

いっています。この梅女の強烈な嫉妬心

を書き付けた前書きに続く発句は風揚げの風が「糸」によるものなら、憎たらしい、と詠じた句。「糸」はもちろんたぐいま進行中の蕪村が恋する相手の小糸。梅女の句は蕪村（風）の心が小糸につながれているなんて本当に憎らしいこと、と露骨に嫉妬心を表わした句です。先ほどの自画賛の中にあつた「都の春色いかに見過こし給ふや」という蕪村への優しい問いかけとはまったく違った感情を吐き出しています。

これにやんわりと続けたのが其答と几董。このツークッションにおいて小糸と蕪村の句が来ます。

小糸が「絵筵（えむしろ）の表は美しいけれど、その裏側はどうなのかしら？」と疑う「表裏」は恋する者が相手の心を疑うという今も昔も無数に唄われる言葉です。嫉妬の心をあらわに表現する梅女の前で何とまあ大胆な、と思えますが、このとき小糸は恐らく十七、八歳。若さのなせるわざだったのでしよう。これに答える蕪村の句は「ちかづきの隣に声す」と小糸のかわいらしい声に親愛の情を示しています。二人の句は梅女の句をまったく無視した唱和になって、二人の世界以外は何も見えないといわんばかりです。この二人の句に大坂新町で名妓と名高く才女の誉れも高かった梅女の心はひどく傷ついたことでしょう。もう一つ付け加えると、梅女はこのとき三十一歳。妓女の世界の大先輩としてのプライドも

傷つけられたはずで

最後の佳葉の「南天の花」の「南天」はもちろん「難転」。悪気の難を他に転じて避けるという意味です。不穏な空気になってきたのを何とかやりすごさねば、という佳葉の苦心がうかがわれます。

五

梅女に関わるエピソードをもう一つ。

一七八〇（安永九）年九月二十五日、几董を中心にして蕪村一門の句会（もちろん蕪村も参加していたはずですが）が開かれました。その会の記録に「文音（書簡で出句すること）」として次のような梅女の句が見えます。

京にのぼりしかど、六条わたりより、

とみに帰りしかば、

都路（みやこじ）や なまなか見ゆる

薄紅葉（うすもみぢ）

これは梅女の句が二十五日の句会の兼題（歌会・句会であらかじめ出された題）であった「紅葉」に対して大坂から出句したことをいったもの。注目したいのは前書きです。梅女が大坂からわざわざ京までやって来たのに六条あたり急に大坂に引き返したのは何故でしょうか。

梅女が京にのぼって来たのは師匠の蕪村とその門人たちに逢うためだった、なかでも師の蕪村に逢うためだったと思わ

れます。それなのに「とみに（急に、とっさに）」大坂に帰ったというのは驚きの行動です。

大坂でのつびきならぬ事情が出来たのか、または蕪村のそばに小糸がいるという情報をつかんだのか。理由はわかりません。筆者の勝手な想像ですが、梅女の嫉妬はこの時期から始まっていたのかもしれない。そして、そうだとすれば蕪村と小糸の関係も、この頃にはすでに始まっていたともいえそうです。繰り返しますが、これはあくまでも筆者の想像であり、確証は何もありません。

ここでいよいよ蕪村「老いらくの恋」の本命である小糸の登場となるのですが、紙数も尽きましたので、それは次回に。

隠された歴史（32）

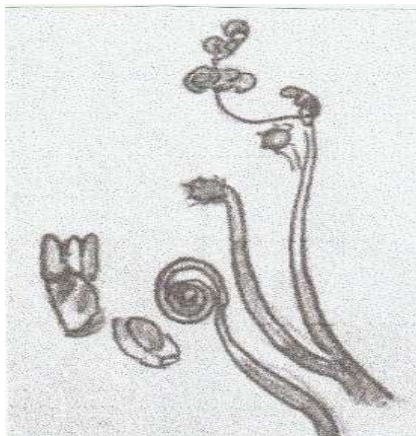
満田 正賢

これまで三回にわたり山崎仁礼男氏の「蘇我王国論」について考察を続けてきました。ところで山崎氏は「蘇我王国論」の後編「天皇制による立体的な歴史の改竄について」、特に八章「偽物だらけの金石文は何故か―藪田嘉一郎氏の『日本上代金石文叢考』を引き継いで」で、近畿に遺る個々の金石文を後代に造られたものと考察しています。山崎氏が立てた「用明・舒明・皇極は架空の天皇だった」という仮説は、金石文によって否定されているからです。この山崎氏の考察に私の考察を加えて各金石文の性格をあきらかにしたいと思えます。最初に、代表的な金石文である墓碑を取り上げます。

山崎氏が検討対象にした三つの墓碑とその文面は次の通りです。

・船首王後（ふねのおびとおうご）の墓誌。船氏は蘇我蝦夷によって燃やされようとしている「国記」を奪い去って中大兄に献じた、船史恵尺（ふねのふひとえさか）の一族です。

「惟れ船氏の故王後の首は、是れ船氏の中祖王智仁の首の児の故那沛（なへ）の故首の子なり。平娑陀（おさだ）の宮に天の下治ろしめす天皇（敏達）の世に生まれ、等由羅（とゆら）の宮に天の下治ろしめす天皇（推古）に仕え奉り、阿須迦（あすか）の宮に天の下



治ろしめす天皇(舒明)の朝に至りて、
天皇照見しその才の異にて、仕えて功
勳有るを知り、勅して官位大仁を賜わ
り、品を第三となす。阿須迦天皇の末、
歳次辛丑(舒明十三(六四一)年)十
二月三日庚寅に損亡す。故に戊辰年十
二月、松岳山上にて殯葬し婦の安理故
の刀自と共に墓を同じくし、其の大兄
の刀羅古の首の墓と並び作るなり。即
ち万代の靈基を安らかに保ち、永劫の
宝地を牢固にするなり。」

・小野毛人(おののえみし)の墓誌。小
野毛人は有名な小野妹子の子です。

「飛鳥浄御原宮に天の下治ろしめす天皇
(天武)の御朝、太政官兼刑部大卿に
任じ、位は大錦上の小野毛人朝臣の墓。
歳次丁丑の年(天武六(六七七)年)
十二月上旬营造。即ち葬むる。」

・威奈大村骨臓器の墓誌。威奈大村は慶
雲四年(七〇七)四月に越国に没し、
十一月に大和国に葬られたとあります。

「少納言五位下威奈卿并せて序「卿は
諱は大村、檜前(ひのくま)五百野宮
に御宇天皇(宣化)の四世、後の岡本
の聖朝(斉明)の紫冠威奈鏡公の第三
子なり。……後の清原の聖朝(持統)
初めて務広肆を授く。……藤原の聖朝
(文武)……慶雲四年歳は丁未に在る
四月廿四日を以て、疾に寝し越城に終
わる。時に四十六。粵に其の年冬十一
月乙未朔の廿一日乙卯を以て、大倭国
葛木下郡山君里狛井山崗に帰葬す。……」

まず、船首王後の墓誌についてです。

船首王後の墓誌の戊辰年は天智紀七年と
解されています。そしてこの墓碑銘は、
阿須迦天皇(舒明)の实在を伝え、天智
紀七年当時、敏達・推古は「天皇」と呼
ばれていたことの証拠となるとされます。
これに対し、山崎氏は異議を唱えます。
第一に「官位の用語」は後代のものと考
えられることです。これは国史大事典の
指摘ですが、山崎氏自身は「官位の用語」
は浄御原令の制定過程からであるとし、
船首王後の墓誌の戊辰の年は神龜五年の
八十七年目の改葬であると考えます。第
二に天皇の時代を指す「〇〇朝」は天武
期より使われていることです。第三に国
史大事典が「字音仮名として「書紀」に
しかみられない沛(へ)、姿(さ)が用
いられるなど、新しい要素があり、実際
の製作年代は七世紀末から八世紀初めま
で降りる可能性も考えられる」としてい
ることです。

山崎氏は、船首王後の墓誌には死後二
十七年(山崎氏は実際には八十七年後と
考える)もたつて改葬したと書いてある
ことの理由を考えて、日本書紀に異常な
までの船氏の祖先顕彰が目立つことに注
目しました。そして、日本書紀にあらわ
れる字音仮名のこともあり、船氏は書紀
編纂に参画していたのではないかと推測
しました。日本書紀にある船氏祖先の顕
彰記事は以下の三箇所に表示されています。
第一に敏達紀元年の、王辰爾(船氏の祖)

が誰も読めなかった高句麗の国書を読み、
天皇にほめられたという記事です。第二
に欽明紀三十年の、白猪の屯倉で胆津(い
つ)王辰爾の甥)が籍を定めたことを天
皇に高く評価されたという記事です。第
三に皇極紀四年の、大化の改新の時に船
史恵尺(ふねのふひとえさか)が焼かれて
いる国記を取って中大兄に奉ったという
記事です。

すなわち、日本書紀の編纂に深く関わ
り合った船氏が、先祖の墓碑銘を日本書
紀に沿った内容で記したというのが、山
崎氏の主張です。なお補足ですが、山崎
氏は、一方で墓誌の日付と日付干支が「日
本書紀暦日原典」と一致している、すな
わち過去の日付と日付干支が正確に記さ
れているということを考慮し、船氏に墓
誌の手控えがあつたか、改葬の際に古い
墓誌を書紀に合わせて書き替えたのではな
いかと推測しています。

次に小野毛人の墓誌についてです。小
野毛人の墓誌に関して、山崎氏は藪田嘉
一郎氏の「日本上代石叢考」の要点を紹
介しています。藪田氏が解明した要点と
は、第一に「飛鳥浄御原宮」は書紀では
朱鳥元年に定めたことあり、天武六年は
おかしなこと。第二に「飛鳥浄御原治天下
天皇」は生存中には使われないこと。第三
に小野毛人は天武十三年に「朝臣」を
与えられており、天武六年には「臣」とあ
るべきこと。第四に「大錦上」の冠位は
「続紀」和銅七年の「小錦中」と矛盾し

ていること。の四点です。

一方で藪田氏は、墓誌の実際の作成は
天武六年ではないが、丁丑は天武六年を
指しており矛盾していると考察していま
す。そして、伊福吉部徳足比売(いほき
べとことりひめ)臣骨臓器の墓誌、美努
岡万(みのおかま)連の墓誌をみると、
墓誌が追納されている、従つてこの墓誌
は小野毛人の子の毛野の活躍期に死後四
〇年たつて作られたと考えられる、と結
論づけています。参考までに伊福吉部徳
足比売臣骨臓器の墓誌と美努岡万連の墓
誌の内容を紹介します。

・伊福吉部徳足比売(いほきべとことり
ひめ)臣骨臓器の墓誌。伊福吉部徳足
比売は和銅元年(七〇八)に亡くなり、
二年四ヶ月後の七一〇年十月に火葬し、
翌十一月にこの墓誌が作られたとして
います。近畿からは離れています。が、
「隋書倭国伝」に倭国の貴人の殯(も
がり)は三年であると記されています
ので、三回忌での追納という内容は自
然なものです。

「因幡国の法美郡伊福吉部徳足比売は藤
原の大宮に御宇大行天皇(文武)の御
世、慶雲四年歳次丁未春二月二十五日、
従七位下を賜わり仕え奉る。和銅元年
歳次戊申秋七月一日卒するなり。三年
庚戌冬十月火葬し、即ち此処にて殯す。
末代の君等応に崩壊すべからず。上件
前の如し。故に謹んで録に録す。和銅
三年十一月十三日己未。」

・美努岡万連（みのおかまろのむらじ）の墓誌。美努岡万連は遣唐使となった人物です。彼は神龜五年（七二八）に亡くなり、丸二年目の三回忌の天平二年（七三〇）十月に墓誌のみが墓に追納されています。明確に追納です。

「吾が祖美努岡万連は飛鳥浄御原天皇（天武）の御世甲申年正月十六日に、勅して連姓を賜う。藤原宮御宇大行天皇（元正）の御世靈龜二年歳次丙辰正月五日に、從五位下を授し主殿寮の頭に任ず。神龜五年歳次戊辰十月廿日に卒す。春秋六十有七なり。・・仍て斯の文を作りて、中墓に納置する。天平二年歳次庚午十月〇日。」

次に威奈大村骨臓器の墓誌についてです。山崎氏は、書紀成立前に齊明が「後の岡本の聖朝」と「後」を付けて呼ばれたとは考えにくいという点を後代造作説の理由として挙げています。

さて、墓誌の偽物や追納の理由について、山崎氏は持統紀五年（六八一）八月の「一八の氏に大三輪、雀部・石上・藤原・石川・巨勢・膳部・春日・上毛野・大伴・紀伊・平群・羽田・阿倍・佐伯・采女・穂積・安曇に詔して、其の祖等の墓記を上進らしむ」という記事に注目します。この記事は通説では、日本書紀編纂の為の原史料の収集と解されていますが、山崎氏は、墓誌を集めたのは日本書紀編纂の為という解釈に疑問を呈します。又山崎氏が取り上げた三つの墓誌以外で、

近畿で発見された墓誌を古い順にみると「文禰麻呂の墓誌」の慶雲四年（七〇七）、次に「僧道楽の墓誌の和銅七年（七一四）で、吉備の「下道閉勝・閉依母夫人骨臓器（和銅元年・七〇八）、因幡の伊福吉部徳足比売臣の墓誌（和銅三年・七一〇）と同年代であり、銅版への墓誌の作成が一般的だったとすると、近畿での銅版墓誌の出土が異常に少ないと指摘します。

そして、山崎氏は墓誌を集めた真の理由は、すべての氏族の墓誌を徹底的にチェックして、都合の悪いものを破棄する為ではないかと推測します。墓誌を埋納する風習が相当広まっていたことは「書紀」が天智紀八年に藤原鎌足の「碑に曰へらく、春秋五十有六にて薨せぬといえり」と書き、藤原氏の「家伝」が「仍て碑文を製す。今別巻にあり」とあることでわかります。又伊福吉部徳足比売臣の墓誌に使用された漢字の「罍」に注目します。この「罍」は本来「おの・すき・やじり」の意味であり「碑」文の意味を持ちません。この「罍」の漢字を「碑」文の意味で使用したのは、銅版に墓誌を書くことが広く行われていたからと考察します。

以上の考察の結果として、船首王後の墓誌、小野毛人の墓誌、威奈大村骨臓器の墓誌の三つの墓誌は、書紀作成時の墓誌破棄の後の、偽のアリバイ作りではないかと結論づけています。

山崎氏の考察に対し、私の考察を補足

します。まず、持統五年に墓誌を集めたのは、日本書紀による歴史の創作の為に都合の悪い墓誌を廃棄する為だったという山崎氏の考察は正しいと考えます。そうでなければこの一八氏の墓誌が記された銅板（石板）が発見されて然るべきと考えられるからです。又、山崎氏が取り上げた三つの墓誌は記紀によって作られた歴史に従って後代に追納されたものという見方も正しいと考えます。

但し日本書紀のアリバイ作りのため意図的に作られたという見方には疑問があります。船首王後の墓誌に記された天皇の宮名をみると、日本書紀の記述に厳格には従っていません。日本書紀には敏達の宮は「百済大井宮」、推古の宮は「豊浦宮」、舒明の宮は「岡本宮」と記されています。船首王後の墓誌に記された宮名は敏達、舒明については日本書紀どおりの記述ではありません。しかし、敏達の宮は古事記が「他田（おさだ）宮」と記しており（但し古事記は推古の宮は小治田宮と記しています）、舒明の宮については日本書紀の記述が「飛鳥岡傍、是謂岡本宮」となっていますので、各天皇の宮名が敏達・推古・舒明の各宮を指しているのは間違いないと考えます。古事記と日本書紀の宮名に違いがあるように、記紀が創作した過去の天皇の宮名は複数の宮名で語られており、宮名があまり重要ではないことが見通せます。追納墓誌の作者はその中の一つの宮名を選択した、す

なわち日本書紀のアリバイ作りという意図は持っていないかったと考えられるからです。

「道をゆく」（26）

成瀬 和之

「熊野街道」（二三）

紀伊路から中辺路は中世までの公式参拜ルートでした。上皇や貴族は京の都から淀川を船で下り、現在の天満橋付近に上陸しました。八軒家から紀伊路を南下して田辺から中辺路に入りました。「中辺路」の呼称は近世以降のもので、古くは田辺以東も含めて紀伊路（紀路（きじ）ともいう）と呼んでいました。熊野の玄関口として「口熊野」と呼ばれた田辺から山中を進む中辺路は熊野古道ウォーキングの中心ルートともなっており、田辺からバスで四〇分、滝尻王子から歩き始めるのが定番です。

滝尻王子から、不帰王子、高原王子、大門王子、十丈王子、大坂本王子、近露王子、比曽原王子、桜継王子、中川王子、小広王子、熊瀬川王子、岩上王子、湯川王子、猪鼻王子、発心門王子、水吞王子、伏拝王子、祓殿王子の九十九王子を経て熊野本宮大社に至ります。

ここでは中辺路の中から初心者向きのルートを一コース紹介することにします。

①滝尻王子から高原霧の里へ

滝尻王子は滝尻バス停からすぐのところにあります。富田川に架かる滝尻橋を渡った右に熊野古道館、左に滝尻王子があります。

熊野古道館は休憩所を兼ねた中辺路の拠点施設です。滝尻王子社の収蔵品や「中右記(ちゅうゆうき)」「熊野参詣日記」など熊野古道の平安期の記録などをパネル展示しています。ウォーキング前に立ち寄って、予備知識を得、古道案内の地図などを手に入れることも出来ます。

滝尻王子は熊野九十九王子の中でも格の高い五躰(ごたい)王子の一つです。中世には宿泊施設も備えた大社で、上皇の熊野御幸の際には、奉幣や経供養などの儀式、歌会も催されました。

古道は王子社の左を奥へ進んだ所から始まり、右手の階段を上ると、さらに急勾配の登りが待っています。藤原宗忠は「中右記」の中で「手の平を立てたような急坂」と記しています。

登り始めてまもなく大きな岩に出会います。胎内くぐり・乳岩です。奥州の藤原秀衡の伝説があります。

四〇歳を過ぎても子に恵まれなかつた秀衡は熊野権現に参籠し、願いがかなったので、懐妊中の妻と御礼参りの旅に出た。ところが滝尻まで

来たときに産気づき、神が示現して「山上の岩屋で産み、そこに預けなさい」という。熊野詣を済ませ帰って来ると、子は岩から出る乳を飲み、狼に守られ育っていた。そこで秀衡は滝尻王子に七堂伽藍を寄進した。という内容です。

ここから少し登った所が不寝(ねず)王子です。さらに急坂が続きますが、やがて平坦になって剣の山経塚跡があります。このあたりが滝尻からの上り尾根道のピークになります。尾根道を進み、林道を横切り、針地藏を過ぎ、民家の間を抜けます。アスファルト歩道に変わるころ、楠木の大木の傍らに高原熊野神社が鎮座します。

この神社からすぐのところが高原霧の里です。休憩所やトイレなどが完備し、食事休憩に最適です。広い駐車場のベンチからは果無(はてなし)山脈が遠望できます。

この先は人気のない山道が続きます。初心者はこちらで終えると良いでしょう。駐車場の左の道を三〇分ほど下ると国道三二一号の栗栖川バス停に出られます。

②牛馬童子から継桜王子へ

田辺方面と熊野本宮大社を結ぶ国道三二一号線のほぼ中間に位置するのが牛馬童子バス停です。バスを降りると国道の北側に「道の駅 熊野古道中辺路」があります。花笠をイメージした土産販売所

があり梅うどんなどを味わえる喫茶軽食コーナーもあります。中辺路のシンボリックな存在となっている牛馬童子像を大きくした模造の石像が入り口の横に立っています。道の駅の向かい側のバス停横に熊野古道入口があります。階段を上がり左へ行けば滝尻王子方面に戻り、右に行くと牛馬童子方面です。右にコースをとって標識に従って進みます。いったん旧国道を超え、一里塚跡の碑を過ぎるとすぐ

花山法皇の伝説が残る牛馬童子(ぎゅうばどうじ)像(箸折(はしおり)峠)に着きます。箸折峠の林の中、小さな丘の上に花山法皇が熊野御幸の際に経典と法衣を埋めたという宝篋印塔(ほうきょういんと)が立ち、牛馬童子像はその背後にひっそりと佇んでいます。明治時代に造られたこの牛馬童子像は、牛と馬にまたがる僧服の姿で、熊野に参詣した花山法皇の旅姿を模したものと言われています。高さ五〇センチメートルの小さく愛らしい姿です。牛馬童子像と並んで「役行者」像もかわいい造形です。また牛馬童子像の後方には地藏と不動明王と思われる像も立っています。中世末に建てられた宝篋印塔の方が文化財としての価値は高いのですが、牛馬童子像の方に人気があります。

箸折峠から近露(ちかつゆ)へは石畳の道を下りて行く。広い舗装道路の旧国道へ出てすぐ日置川に架かる北野橋を渡る。橋のたもとには目を引くモニユメン

トと「熊野古道なかへち美術館」の看板があります。そのまま直進すれば近露王子です。この王子は古くから知られ、一世紀の参詣者の日記などにも記録されています。日置川で禊を済ませた後に奉幣するのが通例で、一三世紀、藤原定家が随行した後鳥羽院の場合は、王子社参拝の後、滝尻王子に次いで歌会を行っています。

中辺路の近露の里は江戸期には宿場町として賑わいました。現在も数軒の旅館や民宿があり古道ウォーキングの人々に利用されています。

集落を貫く旧国道を歩きます。道路を外れ、山道を少し下りたところが比曾原(ひそはら)王子。さらに二〇分ほど歩くと継桜王子があります。境内に「野中の一方杉、その近くに」とがの木茶屋「秀衡桜」「野中の清水」などの名所旧跡が集まっています。

「野中の一方杉」は枝が片側だけに出ていることから有名です。大木が九本あり、枝のない側はウロと化しています。この見事な大木群は明治の神社合祀令のとき、その費用捻出のため、伐採されようになりました。しかし田辺に住み、終生在野だった博物学の巨人・南方熊楠の反対で、かろうじて残されました。

「秀衡桜」は、滝尻王子近くの「胎内くぐり・乳岩」の時に登場した藤原秀衡の伝説と関係する名木です。秀衡の伝説というのは、次のような内容です。

マルクスから学ぶ(4)

成瀬 和之

秀衡は、岩屋に生まれたばかりの赤ん坊を置き去りにしてきた。その秀衡は、子の無事を祈って、野中で手折りにした桜の枝を地にさし「参詣の帰途この枝に花が咲いていたなら無事まちがいなし」と立願した。本宮での参拝を済ませた帰り道に見ると花が咲いていて、乳岩の子も無事育っていたという。

平安貴族の藤原宗忠の参詣日記「中友記」に「続桜は根元がヒノキで非常に珍しい」と既に出ているので、野中に珍しい接桜の木があったのが、秀衡に結び付けられて伝説化したものようです。

「野中の清水」は、継桜王子社の前から急坂を一〇メートルほど下りたところにあります。道端の崖下から湧き出る名水で、古来多くの旅人の喉を潤してきました。他が渇水の時でも水が枯れることなく、今も近在の人の水汲み場として利用されているそうです。

そこから九十九折れの車道を道なりに下り、国道三一一号線に出れば野中の一方向バス停です。

今回は二コースの紹介だけにしておきます。次回残りの二コースを紹介することにします。

カール・マルクスの「資本論」は「逆立ち経済」を読み解く書物です。「経済の逆立ち」を考える前に、「芥川だより」[二]号(前々号)ではマルクス・ガブリエルによって「思想の逆立ち」について考えてみました。

ところが、私のパソコンが壊れ、前号は休載とさせていただきました。申し訳ありませんでした。次に「政治の逆立ち」について考えてみることにします。

カール・マルクスの職業は何でしょう？ 経済学者ですか？ 革命家ですか？ 青年マルクスはボン大学の法学部に進学しますが、ベルリン大学の法学部に移ります。法学部にいたのに弁護士にならず、哲学にハマってしまった。哲学の博士号を取り、政治的に左傾化していきます。その当時のプロイセン政府は大日本帝国憲法の参考とされたような専制的な性格を強めていました。マルクスが大学に教員として残ることは難しくなってきました。そのため、マルクスはジャーナリストとなり、「ライン新聞」の編集長にまでなります。ところが政府の圧力によってドイツなどで言論活動ができなくなり、1969年、31歳の時にロンドンに移住し、エンゲルスの援助で、なんとか生

活を維持し、「資本論」を書くことができたのです。マルクスは「空気を読めない人」なのでしょう？

「マルクスは私を熱狂させた。この偉大な思想を通じて、私はカントからヘーゲルに至る哲学の流れにはじめて触れた。一つの世界がまるごと私の前に開示されたのである。そのことが私のマルクスへの傾倒をさらに亢進させた。以来、この熱狂が衰えたことはない。社会的あるいは民族誌的な問題に立ち向かうとき、私はまず『ルイ・ボナパルトのブリュメール十八日』か『哲学草稿』の何頁かを開いて、私の思考力に生気を吹き込んでから問題に取り組んだものである。」これは文化人類学者レヴィ・ストロースの『悲しき熱帯』の中の一節です。フランス現代思想家、内田樹は『「こうすれば頭がよくなる」もつとも効率的な方法が「マルクスを読む」ことだったんです。』

『マルクスに同期したその瞬間だけすばらしく頭がよくなった気分になれる』と言っています。

「ヘーゲルはどこかで言っている、すべての世界的な大事件と巨人は二回現れるというようなことを。ただしヘーゲルは、それに加えて次のように言うのを忘れてる——一回目は偉大な悲劇として、二回目は安っぽい茶番劇として、と」。これは『ルイ・ボナパルトのブリュメール十八日』の有名な

な冒頭です。伯父ナポレオン皇帝のクーデターをまねた甥ルイ・ナポレオンのクーデターをマルクスは茶番劇と呼んだのです。

今日の日本でも、悲劇的な死を遂げた幕末の英雄・坂本龍馬らの活躍をほんの上っ面だけまねた集団が「維新」を標榜したり、A級戦犯容疑者の甥ならぬ孫たちが祖父の七光りに照らされて旧憲法への逆行をめざす改憲案を振りかざしたりしています。

普通選挙を通じて、なぜルイ・ナポレオンのような専制支配が生まれるのか？ この問いは、すぐれて今日的な問題です。

『ルイ・ボナパルトのブリュメール十八日』の登場人物は「すべての階級のかす、くず、ごみ」と、今日なら「放送禁止用語」でマルクスが罵倒したような連中です。

ジャーナリスト・マルクスは、いら立ちを隠せないような不可解な、いまだかつて経験したことのない政治的事象を前にして、頭をフル回転させて分析しました。

その「フル回転」のすばらしさにレヴィ・ストロースや内田樹は見惚れ、同期しようとしているのでしょうか。

マルクスが到達した結論は、「分割地農民」(小農民)こそがボナパルト帝政の社会的基盤だ、ということでした。フランス革命によって封建的土地

所有が解体したとき、地主の所有地が

農民に分割され、そこに勤労農民の小

経営が生まれました。それが「分割地

農民」です。では、支配階級であるブ

ルジョアジーは、この国家とどうい

う関係にあるのか？ボナパルトはブル

ジョアジーの政治的力を打ち砕いて皇

帝になったのですが、「中間階級（ブル

ジョアジー）の代表をもって自任し、

この趣旨の法令を出す」のです。「分

割地農民」に支持されたボナパルトの

背後にはブルジョアジーが隠れていた

のです。ボナパルト帝政は、内部に矛

盾する傾向を含んではいますが、れっ

きとしたブルジョア国家の一つの政治

形態だったことを、マルクスは分析の

結果暴き出したのです。そして労働者

は農民を味方につけないと革命は勝利

しえないことに気づいたので。今日

でいうと「統一戦線」や「野党共闘」

の流れにつながるのでしょうか。

ルイ・ボナパルトの政治支配は22年

間続きます。マルクスは「茶番劇」と

言いましたが、ルイ・ボナパルトは「茶

番劇を茶番劇として演じ切る」演劇作

法に忠実な「役者」でした。政治状況

についてのメタ認知という点では、ル

イ・ボナパルトは彼の政敵たちより一

枚上手でした。そのことを見逃しては

ならないでしょう。

英紙「テレグラフ」の調査によると、

私たちが一日にさらされる情報量は

1986年から約20年間で4倍以上の新

聞「F」部相当まで増えたそうです。

人々は情報過多で思考停止してしまう

のです。「知識を与えれば行動する」

というのは思い込みで、正確で多すぎ

る情報はむしろ受け手の理解を妨げる

のです。その教訓から、ヘルスコミュ

ニケーションを専門とする奥原剛は、

「情報量を絞る」「視覚的・具体的に

伝える」「中学生にもわかるように伝

える」「受け手の視点で考える」など

「人を動かす10原則」を提唱していま

す（毎日新聞5月11日付）。なお奥

原氏の著書に「実践 行動変容のため

のヘルスコミュニケーション」（大

修館書店）があります。毎日新聞の書

評欄で紹介されていたのですが、まだ

私は読んでいません。

つまり、正しいと思う政治的見解も、

受け手に伝わるような工夫なしには伝

わらないということ。電通など「商

品を売るプロ」が政権の周りを取り囲

んでいることを考えれば、茶番劇を「馬

鹿にするほうが馬鹿にされる」ことを

肝に銘じておきましょう。「逆立ち政

治」の原因は、知性を振り絞って多様

な側面から考えてみる必要があるでし

ょう。

今回は、『ルイ・ボナパルトのブリ

ュメール十八日』から「政治の逆立ち」

について考えてみました。

俳句

土田 裕

山毛櫟（ぶな）抱けば水音聞こゆ立夏かな

城跡に座して新緑ひとり占め

水に透け日に透け多摩の香魚かな

燕の巢残し畳屋店を閉つ

まだ続く自粛の暮らし梅雨に入る

影山 武司

キャンバスにまづは青置く立夏かな

南吹くマウスを包む手の湿り

菩提寺の背戸の小径や山滴る

薄切りのレモン噛む朝聖五月

薫風の抜くる画室の絵の具皿

肩車小さき素足のふんはりと

地ビールや品書きなべて土地由来

なだらかな岬への道白日傘

伊良湖崎へ群青の波南風

青白く硬貨揺らめく泉かな

18 ページ 「ふみの道草（36）」の続き

遂に、というべきであろう。以上に引用

したのは、五月二十六日付朝日新聞の社説

である。信濃毎日、高知、神戸、西日本、

沖縄タイムスなどのオリエンティック中止を

説く地方紙に続き、中央紙が明確に中止を

求めるに至った。我が『芥川だより』の記

録に留めるに値する社説であろう。

昨年来の新型コロナの収束が見えない

中で、「五輪を手放したら政権に止めを刺

される」と思っているのか、五輪中止を言

わない政府の姿勢は、先の大戦と同じく、

やがて来る悲劇を想起させると言う人も

いる。しかし、大きく違うのは、今や八割

を越える国民が五輪の中止・再延期の声を

上げ、コロナ対策への政府の無策を見抜い

ていることである。

これほどまでに国民から遊離した政府

は退陣させるしかない。後は、国民がいつ、

そう思うかである。

編集後記

SK生

「ねばならぬもののみふえて五月尽」加藤

瑠璃子）梅雨になったがコロナ禍は収ま

らぬ。「ねばならぬ」ものに囲まれる日々

は早く抜け出したいが、アフターコロナも

怖い。増税、高齢者の医療費値上げ等はコ

ロナ以上に恐怖だ。どこかに貧苦も病苦も

を見上げている。明日は晴れかな、と。

六月の花々



「ブルー・バイユー」



「花菖蒲」



「レンゲショウマ」

京都府立植物園にて by 石川 吾郎

(社説)夏の東京五輪 中止の決断を首相に求める

新型コロナウイルスの感染拡大は止まらず、東京都などに出されている緊急事態宣言の再延長は避けられない情勢だ。

この夏にその東京で五輪・パラリンピックを開くことが理にかなうとはとても思えない。人々の当然の疑問や懸念に向き合おうとせず、突き進む政府、都、五輪関係者らに対する不信と反発は広がるばかりだ。

冷静に、客観的に周囲の状況を見極め、今夏の開催の中止を決断するよう菅首相に求める。

生命・健康が最優先

驚くべき発言があった。

国際オリンピック委員会(IOC)のコーツ副会長が先週、宣言下でも五輪は開けるとの認識を記者会見で述べた。

だが、ただ競技が無事成立すればよいという話ではない。国民の感覚とずれば明らかで、明確な根拠を示さないうまま「イエス」と言い切るその様子は、IOCの独善的な体質を改めて印象づける形となった。

選手をはじめ、五輪を目標に努力し、様々な準備をしてきた多くの人を考えれば、中止はむしろ避けたい。だが何より大切なのは、市民の生命であり、日々のくらしを支え、成り立たせる基

盤を維持することだ。五輪によってそれが脅かされるような事態を招いてはならない。

まず恐れるのは、言うまでもない、健康への脅威だ。

この先、感染の拡大が落ち着く保証はなく、むしろ変異株の出現で警戒の度は強まっている。一般へのワクチン接種が始まったものの対象は高齢者に限られ、集団免疫の状態をつくり出せるとしてもかなり先だ。

そこに選手と関係者で9万を超す人が入国する。無観客にしたとしても、ボランティアを含めると十数万規模の人間が集まり、活動し、終わればそれぞれの国や地元に戻る。世界からウイルスが入りこみ、また各地に散っていく可能性は拭えない。

IOCや組織委員会は「検査と隔離」で対応するといひ、この方式で多くの国際大会が開かれてきた実績を強調する。しかし五輪は規模がまるで違う。

「賭け」は許されない

選手や競技役員らの行動は、おおむねコントロールできるかもしれない。だが、それ以外の人たちについては自制に頼らざるを得ない部分が多い。

順守すべき行動ルールも詳細まで決まっておらず、このままではぶつつけ本番で大会を迎えることになる。当初から不安視されてきた酷暑対策との両立も容易な話ではない。

組織委は医療従事者を確保するめどがつつあると言う。では、いざという場合の病床はどうか。医療の逼迫(ひっばく)に悩む東京近隣の各知事は、五輪関係者だからといって優遇することはできないと表明している。県民を守る首長として当然の判断だ。誰もが安全・安心を確保できる状況にはほど遠い。残念ながらそれが現実ではないか。

もちろんうまくいく可能性がないわけではない。しかしリスクへの備えを幾重にも張り巡らせ、それが機能して初めて成り立つのが五輪だ。十全ではないとわかっているのに踏み切つて問題が起きたら、誰が責任をとるのか、とれるのか。「賭け」は許されないと知るべきだ。

こうした認識は多くの市民が共有するところだ。今月の小紙の世論調査で、この夏の開催を支持する答えは14%にとどまった。背景には、五輪を開催する意義そのものへの疑念が深まっていることもうかがえる。

五輪は単に世界一を決める場ではない。肥大化やゆきすぎた商業主義など数々の問題を指摘されながらも支持をつなぎとめてきたのは、掲げる理想への共感があったからだ。五輪憲章は機会の平等と友情、連帯、フェアプレー、相互理解を求め、人間の尊厳を保つことに重きを置く社会の確立をうたう。

憲章の理念はどこへ

ところが現状はどうか。コロナ禍で、競技によっては予選に出られなかった選手がいる。ワクチン普及が進む国とそうでない国とで厳然たる格差が生じ、それは練習やプレーにも当然影響する。選手村での行動は管理され、事前合宿地などに手を挙げた自治体が期待した、各国選手と住民との交流も難しい。憲章が空文化しているのは明らかではないか。

人々が活動を制限され困難を強いられるなか、それでも五輪を開く意義はどこにあるのか。社説は、政府、都、組織委に説明するよう重ねて訴えたが、腑(ふ)に落ちる答えはなかった。

それどころか誘致時に唱えた復興五輪・コンパクト五輪のめつきがはがれ、「コロナに打ち勝つた証し」も消えた今、五輪は政権を維持し、選挙に臨むための道具になりつつある。国民の声がどうあろうが、首相は開催する意向だと伝えられる。

そもそも五輪とは何か。社会に分断を残し、万人に祝福されない祭典を強行したとき、何を心得て、何を失うのか。首相はよくよく考えねばならない。小池百合子都知事や橋本聖子会長ら組織委の幹部も同様である。

以下の続きは16ページに掲載しています。